

日本音楽集団第七十四回定期演奏会

詩と音楽

# 秋を謳う

昭和五十七年十一月二十日(火)  
午後六時四十五分開演

青山タワーホール

(地下鉄銀座線「外苑前」下車)

主催

日本音楽集団

現代邦楽協議会

構成

花房はるえ

●朗読

伊藤惣一

●客演

安達千枝子・杵屋静子

(出演順)

# 「あいさつ」

秋、その思いは、人さまざま。  
去りゆく秋の夕べ、詩の響きと、音の調べに身をひたし、秋の余韻をかみしめて頂きたいと思えます。  
詩に潜む音楽性、音楽のもつ詩的精神が溶けあい、新しい世界が創り出され、秋空高く謳い上げられます様、また、「芸術の秋」の最後を飾るにふさわしいコンサートであります様に願っています。  
この演奏会の出演を快くお引き受け下さった三味線の梓屋静子氏、唄の安達千枝子氏、朗読の伊藤惣一氏に厚く御礼申し上げます。  
また、詩を選ぶに当りお力添え下さった、小田切清光氏をはじめ皆様感謝致します。

花房はるえ

# 一、秋

望月太八作曲

一九八〇年に作品を依頼された時、笛の曲があまりないことを思い、どなたにでも楽しんで演奏できる曲を考えました。  
初めての作曲なので、頭に浮かんだイメージ（モチーフ）とメロディのつながりが大変難しかったです。  
少しでも「秋」の雰囲気を感じていただければ幸いです。  
(望月太八)

# 四、秋の調べ

宮城道雄作曲

「唄」安達千枝子  
「尺八」宮田耕八朗「箏」白根きぬ子

一九一九年十月（大正八年）作曲。作曲者の名声を決定的にした出世作である。  
庭の桐の葉に吹きつける秋風の印象をヒントに前奏には落葉の散る感じが、また間奏には虫の音が取り入れられている。  
カノン形式を使用した点が、当時としては新しい試みであった。原曲は箏だけの伴奏であったが、大正九年に尺八が加えられた。

小林愛雄 作歌

秋の日のためいきに

落葉とならば

河にうかびて

君が住む宿近く

流れて行こうよ

流れて行こうよ

ふけてゆく秋の夜の

こおろぎとならば

草の葉かげに

君が住む窓近く

夜すがら鳴こうよ

夜すがら鳴こうよ

# 五、秋

長沢勝俊作曲  
子供の四季より

「笛」藤崎重康「尺八」坂田誠山・田嶋直士

「琵琶」田原順子「箏」吉村七重・滝田美智子

「十七絃」花房はるえ「打楽器」尾崎太一・堅田啓輝

「コーラス」松本和美・佐藤里美・小林恵美子・大畠菜穂子

山本哲子・飛山百合子・岡田寿子・内藤久子・荻野けい子

日本の四季のうつりかわりは特に美しいといわれています。我々の祖先はこの四季のさまざまな変化に感じていろいろな民俗芸能を生み出し育ててきました。この曲は子供の目をおしてみた日本の四季をファンタスティックにえがいたものです。  
一九六六年NHKの委嘱により作曲したもので、春、夏、秋、冬の四つの章よりできています。各章のあたりにそれぞれ季節感をもつわらべ唄や祭りのかけ声がうたわれ、それを受けて日本楽器のアンサンブルが自由な形でその季節の幻想をくりひろげていきます。(長沢勝俊)

今回は、その中「秋」の部分演奏致します。

# 六、玉桂

長沢勝俊作曲  
三絃独奏曲

「三味線」杵屋静子

玉桂とは月の異称です。月には兎が住むという説話は、世界の広い地域に残っていますが、中国では大きな桂の木の下に月宮殿があるといわれてきました。日本でも和歌などにこの玉桂という美しい言葉が詠み込まれていました。月の満ちては欠ける現象が人々の目をひき、様々な説話が生まれたのでしよう。人間が月に行く現代でも、月の光は無限に広がる宇宙の神秘やロマンを感じさせてくれます。古来から多くの人々の夢をはぐくんできた月への想いを、三つの絃に託して書いてみました。  
(長沢勝俊)

# 二、紫苑

山本邦山作曲  
尺八と十七絃のための二章

「尺八」三橋貴風「十七絃」宮本幸子

山地に自生するという紫苑は初秋の頃、淡紫色の優美な花を咲かせる。その傘状の小さな花は、雨露の気を受けるといっそう可憐さを増し、直立した茎は、ある力強さをさえ感じさせる。その様を第一楽章で、第二楽章は霜を受けた大きくざらついた葉の光りかがやく様を表わしている。一九七七年十一月 作曲

# 三、孤

杵屋正邦作曲  
太棹のためのコンポジション

「太棹」坂井敏子

元来、義太夫三味線は語りものの伴奏楽器として何らかの情景や心を表現するので、それから離れた絶対音楽としての扱いは、義太夫節二八〇年の歴史の中でも始めての試みといえる。

これまでにない音程やリズムなど現代的な手法を用いながら、全体としては最も伝統的な太棹の性格を表わそうとしています。あるいは旋律楽器として、場合によっては打楽器的性格の楽器という太棹のもつ表現力の豊かさとその可能性を追求した曲である。一九六七年作曲。

特に秋に関係はありませんが、個々の音の妙に、静かな秋の夜、一人もの思いにふけり考えるという印象を受け、取り上げてみました。  
(花房)

# 七、秋の曲

三木 稔作曲

「尺八」坂田誠山「二十絃箏」野坂恵子

秋を想いながらではあったが、音楽の領域を踏み外すことのないよう心がけて書いた。つまり、哀しくも美しいこの第三の季節に触発されて生れる音を整理し、秩序立てることが私の仕事であった。おどろおどろしい尺八の表現力に溺れず、また、私自身あらゆる角度で追求してきた二十絃箏の技法も、一部に限定することにより、描写や感覚への深入りにストイックに対処した。

全体で十三分程の曲だが、二章に分れ、〈序章〉は二つの楽器の対話で進められる。Parlando rubato。主部にあたる〈秋のファンタジー〉はテンポが早くなり、両楽器に下降音型が特徴的に現れる。Tempo giusto。の主部の間にやや雅びを尊ぶゆるやかな部分がはさまれている。(私)のファンタジーだけを独立して演奏してもよい。私にとって、尺八と箏のオリジナルなduetは初めてである。  
一九八〇年作曲  
(三木 稔)

# 八、秋、そして

三木 稔作曲  
〈四季〉ダンスコンセルタントIより

「笛」藤崎重康「尺八」坂田誠山・田嶋直士

「三味線」加藤洋「琵琶」田原順子

「箏」吉村七重・滝田美智子「十七絃」花房はるえ

「打楽器」尾崎太一・堅田啓輝

この曲は作曲者が、かつて作曲を担当した舞踊シーンから楽しい易しい旋律を選び、一九七三年夏の合奏研究会でアマチュアの人たちにも演奏できるよう再編成された組曲。四季を表現する各章は文字通り「踊る春」抒情的な「水巡る」秋、そして「穫り入れの踊りを経て、クールな〈風の花〉が「エビローグ」でしめくられる構成になっています。今回はその中「秋、そして」それに「エビローグ」を加えて演奏致します。